

毛利壺邸と瀧川利雍 ②

勝間田 三千夫

(会員・佐伯市中村北町)

瀧川利雍

利雍。初め利濟・郁之丞・鞆負・帯刀・肅之という。

瀧川家を継いで名を利雍と改めた。号は玉芝園。通称南谷。前述のように毛利壺邸(襲)が水戸の家臣徳川氏の老職山野邊兵庫頭義胤の養子となって生まれた長子で、後、天明五年瀧川家の養子となった。

先ず、利雍を語る前に瀧川家について見ることにする。瀧川家は、嘗常陸国新治郡に二萬石を領していた。しかし、二代正利の時、忠勤に励みながらも、寛永二年多病にして勤仕に耐えず、また、世継なきにより所領一万八千石を収められ、当国に於て二千石を領するのみとなった。そして、四代利錦のとき、元禄十年采地を移され蒲生郡のうち四千石を知行した。

その後、九代利廣に到ってまたもや世継なく、利廣終わりに臨んで佐伯藩七代藩主高丘の五男一貞を養子としたのである。『徳川実紀』にその前後を見ると、次のようである。

「瀧川八代利端子なきにより失しければその伯父大学利廣して家をつがしむ」

「宝暦十二年九月朔日、利廣駿府加番のいとま賜わる安永六年八月二十七日没す。三十九歳」

元来、禄は主君が家来の武功忠勤に対して与えられたもので、その働きのよっては加増されるため功名に心掛けたものであった。しかし、泰平の世となったこの時代には武士階級も安定し、一代限りの禄から代々世襲として保証されるに至った。よって武士の禄高は不変となりその反面に義務の重圧は避けられなくなった。即ち、家格と家禄によって厳然と区別され、永久に出世の道はなくなつたのである。

そこで、武士が主君のお目に止まるには別の事で忠勤を励まなければならなくなった。即ち、役に付くことが第一の出世への手掛かりとなり、御役上の手柄で家禄を増すのである。こうして得た家禄は、主家が滅亡するか

改易にならない限り永代世襲となったのである。

ところが、役人となるにも限りがあり、必要な武士だけで役につかない武士もあった。徳川幕府直属の旗本・御家人となると役に付けないからといって禄を与えないことは出来ない。無役でも家禄を与えて置いて有事に備えなければならなかった。こういった無役の武士に対して幕府は一つの組織を作って寄合（三千石以上）・小普請組（三千石未満）とした。

一般的に旗本とは御目見得以上（二百石以上）で、それ未満を御家人（二百石未満）といっている。

このように大名と旗本とは大変な区別があり、大名は禄に格付で優遇されていたが、しかし、重要な政治職務は旗本によって占められるという。禄は少ないが重要な役を握っていた。

こうして瀧川家は寄合を世襲し、無役といっても禄高に応じたノルマとして十二ヶ所の門番の内駿府の加番を勤めたのである。

一貞は、初め高納・利雄・徳十郎・伊織・兵庫助とい

った。「安永六年（一七七七）十一月八日、瀧川家の遺跡を

継ぐ、同年十二月二十一日はじめて俊明院殿（家治）にまみえたてまつる」

「安永七年九月朔日、寄合瀧川兵庫助一貞駿府の加番にさされいとま給はる」

この瀧川兵庫助一貞は佐伯藩八代高標侯の弟にあたる。後、一貞には一子鶴之丞が生れ、生子安泰と歓喜の矢先一貞病の床につき、その状は日々に重く、嫡子は幼にして家督相続かなわず、病篤に臨んで利雍を養子に迎え嫡男とした。「瀧川兵庫助一貞が養子帯刀利雍父死して其子家をつぐ」よって一貞の一子鶴之丞は二男となり、未だ幼少のため利雍の養育をうけた。天明五年二月十九日一貞は二十八歳の生涯を閉じた。

利雍は天明五年五月六日二十六歳で瀧川家の十一代当主となった。その系図に「実は佐伯藩毛利周防守高慶が四男森図書襲が男」と。妻は酒井飛騨守忠香の女である「天明五年十二月九日臨時の朝会の席で寄合瀧川帯刀利雍初て俊明院殿に見参す」

「天明六年十二月二日中奥の御小姓となる」

利雍二十七歳で若年寄支配の役中奥御小姓となり、將軍中奥出座の時、君側の雑用を勤める持高づとめとなっ

た。

「同七年三月十八日將軍宣下により従五位下長門守に叙任」

「寛政八年六月五日小普請組支配に転ず」

三十七歳になって御小普請組支配に進んだ。これも持高勤めである。

これより先、利雍また子に恵まれず、よって二男鶴之丞を養子とした。鶴之丞名を改め美利。寛政六年八月十五日初て將軍家齊にまみえたてまつった。時に十歳。そして同年九月二十七日には若君（家慶）が山王社に詣で賜うとき小人騎馬を勤めた。

では一貞はなぜ利雍を瀧川家の後継ぎに望んだのか。それは、天和三年七月武家諸法度頒布の養子制に、また宝暦三年十月の養子制に基づくものであり、一貞と利雍の続柄は、利雍は一貞の父七代藩主高丘と従兄弟にあたる。もっとも一貞の兄弟は、高標（既に八代藩主）をはじめ男四人で、一貞が四男である。従って一貞の後継になる兄弟は既になかった。

一方、前述のように壺邸には長子利雍と女と盛平の三人がいるが、利雍だけが父母と共に暮らしていた。よっ

てこの時、毛利の血族は利雍だけであった。かといって利雍の父（裝）を後継する立場にあったはずであるが、その考察には諸々交錯するものがある。いかに毛利家の血族とはいえ、壺邸の位置から見れば三代目に当るし、日々の流れに経済的にもその暮らしは決して豊かではなかったろう。しかし、壺邸には経済的な望みはなかったと思われ、むしろ学問による森家再興の考えはあったろう。

利雍の学問には、父壺邸の学問が大いに影響したことは言うまでもない。大内熊耳の高足こそ父の学友であり殊に大竹東海（岳太伸・岳融）と熊耳の養子大内蘭室（良助）の影響は多大であった。高標も幼少のころからこの両儒に師事している。利雍は四歳上の高標を兄のように欽仰し、ともに徂徠の学問をなした。両儒は佐伯藩江戸邸で近臣の藩儒的存在であったとみるのである。

今日、毛利高標の学識を語るとき、その蔭に毛利壺邸の存在価値を知らねばならないし、それに況して瀧川利雍の学問を抜きでは語れないからである。

寛政二年の文教改革の準備は、天明二三年ごろから奨

められたといわれ、以後文運は次第に高まっていき、諸大名の中でも好学の士柳間詰の三学者と称せられた三侯がクローズアップされるに到ったのである。

この柳間詰の三学者と称される三侯を筆者は寛政の文学三侯と呼んでいる。即ち、佐伯藩八代藩主毛利伊勢守高標・因幡鳥取藩支西館藩五代藩主池田大隅守定常、そして近江仁正寺藩主市橋下総守長昭のことであるが、中でも池田定常との文雅の交わりは深かった。

禄高は

佐伯藩 二万石 毛利高標 宝暦五年（一七五五）

― 享和元年（一八〇一）

支西館藩 二万石 池田定常 明和四年（一七六七）

― 天保四年（一八三三）

仁正寺藩 一・八万石 市橋長昭

安永二年（一七七三）―文化十一年（一八一四）

であり、共に小藩の小大名であるが、学問においては、大藩大名と申し上げたい。また、三侯は外様大名であり、江戸城にあっては柳の間詰である。

外様大名の勤めは、譜代大名の政治の参与と異なっており、幕府への服従であったが、学問に於いては、老中に松平

定信が職すによってこの限りではなかった。つまり、学問は任務・禄高・間詰等越えて為されたのである。

今すこし池田定常について概観すると、定常は、実は幕府の旗本池田半蔵政勝の第二子として江戸に生まれた。安永二年に西館池田大隅守定得が終りに臨んで、幕府の許可を得て養子とした。よって同年七月二十八日西館へ移り、九月十八日家督を命ぜられた。ときに七歳であった。

天明五年襲封。天明六年十二月登営し、従五位下縫殿頭に叙任された。後、享和元年十一月二十四日病と称して、幕府に隠居を願い、在職二十九年にして家督を嫡男定興に譲り、致仕して冠山と号した。この時、定常は三十四歳であった。後に松防縫殿頭冠山で知られる人物である。

在職中、定常は侯中文学の中心的人物であったと言っても過言ではあるまい。定常の交友の広さを見ても、松平定信は別格にして林述斎・松崎廉堂・佐藤一斎・谷文兆・大窪詩仏・大田南畝・塙保己一・市河米庵等好学の名を挙げることができる。

また、高標との交わりは養父定得の代からで、定得が

同じ柳の間詰であり、好学の侯であったがため切磋の中にあつた。今、その後を受けて親交を深め風月の交わりを結んだのである。そのことは定常が後に著した隨筆の一節に「父大隅守殿と同庚なりとて、予をば殊に愛せられ氏し(略)」とあることから知られるのである。

定常在職二十九年間。そして、致仕後没年に至るまで学問の業績には偉大なものがある(後述)。

某書に利雍が定常とも親交をなしたのは佐伯藩侯毛利高標の弟に生れ、高標との交わりが深いが故に、この兩人は交わりがあつたと思われるといつているが、それは高標の紹介によつて、この利雍も同じ風月社を結んだことを意図するものである。また、高標の弟に生れたとあるが、それは統柄を簡単に言つたものであろう。ともあれ二人は常に相会する仲間となり、その交わりは海深三千尺に勝る深さであつた。

抑々この風月社盟の始まりを見ると、備中無川の地頭戸川伯家が詩好の有志を自邸に招き、事をすすめるうちに多くの文士が会するようになった。後、伯家が定常と市橋長昭とを招邀されるようになって結社されたといわ

れている。後に池田定常・毛利高標・市橋長昭・松平景許諸侯、その他詞客十一名で結社された。

いま同志と共に風月社を結び文雅を以つて友を会した人々を見ると、

毛利高標(霞山) 松平景許(蕉隱) 市橋長昭

(世懋) 戸田光一(子誠) 瀧川利濟(肅之)

戸川達邦(伯家) 杉本樗園(忠温) 波江潜夫

(虬) 秋田季濟(君人)

等であり、その他席に陪する者は大竹子陽・孫和卿・清水子鏗・木口君懋らが常に会する人々であつた。中でも毛利高標・瀧川利濟(利雍)・秋田季濟の三人は毛利家の血族である。前述した(毛利壺邸)小宮山楓軒「懷寶日札」にいう「近臣皆樂を肆ひ詩を賦す」の人々である。

秋田季濟は、初季礼・後中務・内膳といい、君人の名で文人の間に知られている。実は、佐伯藩七代藩主周防守高丘の第四子であり、高標の実弟である。天明元年(一七八一)八月四日、二十五歳の時秋田家を継いだ。

この秋田家は母方の家系にあたる。母は鳥居丹波守忠瞭の女で、この母の弟季満が鳥居家を出て秋田家を継ぎ

五代当主となった。しかし、季満は子に恵まれず、よつて季濟を養子とした。天明元年八月四日季満の致仕を以つて同日、家禄五千石を継いだ。

「天明元年八月四日、寄合秋田淡路守季満が養子中務季濟父致仕してその子家をつぐ」

「同年十二月二十一日初めて俊明院殿（家治）にまみえ奉る」

「同三年九月朔日、寄合秋田内膳季濟駿府加番にさされて暇賜はる」

「同四年十月十五日、寄合秋田内膳季濟駿府加番はてとともに帰謁す」

秋田家は陸奥三春の支流にあたる。この君人学問においては、殊に詩を兄高標と同じ大内熊耳の養子大内蘭室と大竹東海に学び、詩を好むこと兄高標に過ぎ、常に鍛錬を事とした。また、飲酒を嗜み雅遊には必ず沈酔を期とし、帰馬には倒載するには至らなかつたが、その馬に乗って帰る。姿は船に乗るに似て、非笑する人もある程であり、性は謙に順ずるが、己の詩はよしとはしなかつた。と定常は人物評をしているように、佐伯藩の文学を語るとき、抜きでは語れない人の一人である。

さて、利雍は、文士の間に肅之の名で知られていた。また、この風月社に交友するようになったのは高標の紹介によるもので、社においてその詩の始めは風月七子を宗としたが、中歳より晩唐の調を好み、晩年に至り、詩名大いに発し、布衣以上第一の作家といわれるようになった。また、兵法の事にも長じ、経世の才もあり、擢登され甲府勤番支配を命ぜられた。

「寛政十年十二月二十三日甲府勤番の支配に進む」と利雍この年三十九歳。老中支配の役甲府勤番支配となつた。

甲府勤番支配——支配組頭——勤番衆

その役務は、甲府城に駐任して城を守り、勤番衆を統轄して訴訟も臆断する。甲府には御代官は在つたが、町奉行はなかつた。よつて甲府の民政を行い、甲府勤番（二百名）を支配し、甲府御小普請も支配する大役である。御役宅には白洲を設けて甲州一円の刑罰も司どつた。しかし、この革掌の中にも旧来風月の交わりを忘れず往復の書簡にも近作を示した。と定常はその該博をたたえている。

今一度定常に言及して利雍の学の深さを見ることにす

る。

定常の一代の著書は極めて多く、また、学問の幅も広く、地理学者として、仏教研究者として、文学者として傑出せられたと言われている。その著書の多くは享和元年致仕して冠山と号し、第一線を退いた後、心を猶公務につくし、諸学に務めながら池田家譜牒の編集事業に精励された。

伊勢の国学者足代弘訓は、その随筆の中に冠山老侯のその後（隠居）の生活について述べているが、それに依ればすべてにわたって質素儉約の文字に尽きる生活であったと受け止めるのである。こうした生活の中で数多の著作を成している。その中の一著と思われる著書に『芭蕉句集大全』がある。その跋文をなした西島蘭溪の著に『慎夏漫筆』があるので、その一節を示し、利雍の穎哲を偲ぶのである。

冠山南谷二公、有名干好士況二公学徳兼優、以故碩儒名流、四方分集每文酒之会、客来無貴賤、無留干門、譎劣如余、在辱知之末、翠軒西野竹溪諸老、常為席賓、諸老已為異物、二公亦逝、緑苔生閣、芳塵凝樹、噫、
(西島長孫元齡著、弘化丁未仲冬新鐫)

冠山と並び賛称される南谷こと壺郎の子利雍である。

(注) 冠山……池田定常 南谷……瀧川長門守利雍

翠軒……立原 萬 西野……市河世寧

竹溪……大沼 典

「文化元年三月六日甲府勤番支配瀧川出羽守利雍、其勤勞を賞せられて時服を賜ふ」

「文化五年九月十三日小姓組番頭瀧川安芸守利雍病免して寄合となる」

六年間の勤番に功をなし時服を賜ひ、その後御小姓組番頭を勤め、今日もとの寄合に戻る。

御小姓組番頭 御小姓組頭 御小姓衆

御小姓組番頭格

(注) 御小姓組頭……千石高の布衣

御小姓衆……一組五十人・三百俵高

御小姓番頭格……三千石高・御用取次見習

一番から六番まであり、大体三千石以上の旗本から選ばれ、君辺第一の役である。御書院番と御小姓組が交代で將軍の給仕に出、御書院番より多く將軍に近侍して城外勤務はしない。一組に五十人の御小姓衆と一人の組頭

(四組四頭)がいた。諸大夫・菊の間席・四千石高である。

「文化十一年三月二十日寄合瀧川安芸守肝煎となる」

「文化十三年冬日、觀水戸公樂園。源利雅(瀧川利雅)、『懷寶日札』より)。

「文政三年五月六日、寄合肝煎瀧川安芸守病により肝煎を免さる」

この寄合肝煎は十一代將軍家齊のときにできた役職で古くは御留守居支配(老中支配の役職)の役職であった。替わって寄合肝煎五人を置いて支配させた。その一人となった。柳の間席。その職掌は広く、芙蓉の間席、諸大夫で万石級の大名の格であるが、五千石級の旗本から選ばれた。

利雅ここに至って致仕し、文政三年十一月二十九日、六十一歳の生涯を閉じた。その一代の著書に「玉芝園集若干巻」『鎗冥近体声律考一卷』の他に数種の著述ありというが、今日その著書の一葉をも見ることは出来ない。定常が言われるように「己の詩はよしとはしなかった」と。この言からすれば、決して多くは遺されていなかったと思われる。

以上のことから藩文学を完成に導いた先哲の臣の系列を作図して纏めると次ページのようになる。

佐伯藩の文学、そこには復古学派荻生徂徠の学派学問がその源流をなしている。諸藩の中でも学問創業をいち早く形成したのは、全国六十余州広しといえども、元禄中の大和の芝村侯・米沢侯、有馬の三田侯、宝永中の佐伯侯・赤穂侯であり、学校を創立し、藩主自ら率先して文武を励んだ。佐伯藩は時の六代藩主高慶侯によって創立された。

壺邸は、こうした父高慶の好學に倣って水戸に学び、長じて後、自らのハンディを學問を以って乗り越え、その子利雅をはじめ藩近臣の學問の父として静座し、比肩する學者を以って學問へ向かわしめたのである。壺邸その育英の業が如何であったかはこの記述に伺えるところであり、そこには舌売之愛があった。

後の八代藩主高標侯は、藏書家として知られている。その収書には他藩が羨望する程の宝典があり、しかもその多くが漢籍であったことから察するとき、高標は鑑識にも余力を示された人であった。また、時の老中松平定信が、佐伯侯の藏書には天下の絶品ありと、高く評して

復古学派

荻生徂徠

(護園学派)

(略)

(略)

(略)

服部南郭

山県周南

菅谷甘谷

大内熊耳

十二人略

宇佐美講水

海保青陵

宇野明霞

坂本天山

毛利壺邸

大竹東海

(三河人・岳太仲・岳融)

大内蘭室

(熊耳の義子)

田中江南

(四人略)

毛利壺邸

(略)

(略)

立原翠軒

小宮山楓軒

毛利高標

瀧川利雍

秋田季濟

(瀧川一貞)

以上佐伯藩毛利一族

いる事から見て、卓見の人であったことが知られるのである。そうした高標の名声の蔭に壺邱の存在と、その学問の深さが大きく影響したことは確かである。

後の世に理解を求めて二百年の間、壺邱の文学は殆ど知られずに埋もれている。今こそ思いながら筆を執つたものの、壺邱の存在と業績の多くに触れる事は出来なかった。しかし、派生する問題点には興味深いものがあり、後日の課題といたしたい。

また、瀧川利雍については、今後なお瀧川家の史料収集によって深めることが出来ると思われるので進めていきたい。

終りに、婁婁記述する愚筆に対し、貴重な紙面を下さった会に謝すると共に、読者諸氏の感性の一片をも樂ることが出来れば幸いである。

参考文献

寛政重修諸家譜

漢学者伝記及著述集覽

諸大名の学術と文芸の研究（福井久蔵著）

楽翁公伝（渋沢栄一著）

徳川実記

儒学系図（新人物往来社）

夫人名事典

大人物事典

佐伯市史

江戸幕府役職集成（笹間良彦著）

慎夏漫筆（西島長孫元齡著）

淡窓日記（上巻広瀬建著）

漢学者伝記集成

森銚三著作集

日本史総覧（新人物往来社）